インタビュー
書いたのは
私です

高杉 良

Takasugi Ryo

たかすぎ・りょう／'39年東京都生まれ。専門紙の記者や編集長を務める傍ら、'75年に『虚構の城』でデビュー。'83年、退職し作家業に専念。主な作品に『炎の経営者』『小説日本興業銀行』『小説ザ・外資』の他『金融腐蝕列島』5部作など

企業小説の巨匠が惚れ込んだ、一人のベンチャー経営者――。作家人生の集大成となる濃厚な「人間ドラマ」を見よ

――企業小説の第一人者である高杉さんの最新作は、ベンチャー企業「イーパーセル」の経営者・北野譲治氏がモデルです。「イーパーセル」は、安全にデータを送ることができる「電子宅配便」の仕組みを確立した企業。これまでメーカーや銀行など、日本の伝統企業を題材にしてきた高杉さんが、80歳にしてベンチャーに挑まれたのは驚きでした。

実は、今までIT業界は意図的に避けてきたんですよ。自分がよく知らない世界だから、なんとなく胡散臭いな、と思う部分もあって。

そんなイメージを根底から覆したのが、北野さんとの出会いでした。たまたま新聞に掲載されていた彼のインタビュー記事を読んだらとても面白く、すぐに連絡をして、会わせてもらいました。実際に話してみると、実直な人柄にますます惹きこまれ、「あなたを題材に小説を書かせて欲しい」と伝えました。

北野さんも、最初は「信じられない」という反応でしたが、最終的には喜んで協力してくれました。ただ、いまも成長途上の企業を扱うセンシティブなテーマのため、主人公の北野譲治をはじめ、実名を使用する人物と、仮名で登場させる人物とを選りわけました。

――北野は早稲田大学理工学部を卒業したのち、損害保険会社で出来高払いの契約社員の道を選びとり、持ち味の人間性を武器に叩き上げてきた「伝説の営業マン」。その後、自ら保険代理店を立ち上げて順風満帆の人生を送っていた彼に、大きな転機が訪れます。

北野は、学生時代の友人から「すごい人物だから」と紹介され、イーパーセルの創業者である財津正明（仮名）という人物に出会います。同社はアメリカで大きな評価を獲得し、日本進出のタイミングを迎えていました。

北野の行動力や人間性に惚れ込んだ財津は、2日連続で北野をホテルの高級ディナーへと誘い、「技術で世界を変えよう」と延々と口説き続けます。しかも、2日目の晩は、乗り気ではない北野を無理やり駅に引き止めて、終電まで2時間もまくしたてる。これ、実話ですよ（笑）。

――財津の熱意や、ITという未知の領域への強い興味もあり、北野はイーパーセルへの入社を決断します。てっきり、このまま北野と財津の両輪で日本での事業がスタートすると思いきや……。

財津の口ぶりからして、「三顧の礼」をもって経営のパートナーとして迎えられると思い込んでいた北野ですが、実際に入社してみると、3人も上司がいる「部長待遇」だった。しかも、年俸も社長時代の半分にも満たないことが判明します。あわてて財津に抗議しても、取り付く島もない。

順調だった自分の会社を離れてまで臨んだ新天地で不意打ちを食らい、さすがの北野もうろたえます。しかし、ここで諦めないのが並の人物とは違うところ。北野は退路を絶ってイーパーセルを支えることを決断します。

――その後、財津が求心力を失っていくなかで、北野は誠実な仕事を積み重ね、周囲の信頼を集めていきます。この二人のキャラクターが浮き彫りになる物語の中盤には、高杉流「人間ドラマ」の醍醐味が詰まっています。

財津は典型的な「創業者タイプ」なんです。「0」から「1」を作り出す能力はずば抜けていて、カリスマ的な弁舌の巧みさもあるのだけど、いざ事業を拡大させるフェーズになると、強烈なキャラクターに周りがついていけなくなる。

『雨にも負けず
小説ITベンチャー』
KADOKAWA／1600円

一方、北野さんには、取引先や部下に「この人と仕事がしたい」と思わせるような度量がある。「1」を「100」にできる人です。この二人の性格の違いは、書いていても面白かったですね。

――北野は、その後も幾度となく訪れる逆境にめげず、何度でも立ち上がって前に進んでいく。本当に『雨にも負けず』という本書のタイトルがぴったりの人物ですよね。

初めて北野さんの会社へ伺った時、会議室に通されると、2mほどの大きな揮毫（きごう）が掲げられていました。そこに書かれていたのが、宮沢賢治の『雨ニモマケズ』だったのです。質素に生きながらも、周りへの配慮を欠かさず、そして屈しない。

まさに、北野さんの生き様と重なる詩だったので、この作品のタイトルにすることに、迷いはありませんでした。

とかく社長といったら、オフィスに豪華な社長室をこさえがちですが、彼はそんなことには一切興味がない。いまでも、他の社員たちと同じフロアで、肩を並べて仕事に励んでいます。

――今回、新たなテーマに果敢に挑まれた高杉さんですが、一方で「企業小説を書くのはこれが最後」とも仰っているそうですね。新たな高杉作品を読めなくなると思うと、なんとも名残惜しい気持ちになります。

この歳になると、やっぱり体力がね……。僕は自分の足を使った「徹底取材」を身上にしているけれど、だんだん取材先に行くのもつらくなってきました。そのうえ加齢黄斑変性で視力が低下していますので、この作品も妻にサポートしてもらいながら、なんとか書き上げたんです。自分の生い立ちを書くのは別として、「企業小説家・高杉良」としての作品は、これで最後かな、と。

思えば、40年以上ずっと「人の物語」を描き続けてきて、最後の作品で北野譲治さんという人物に出会えたことは、とても幸せなことでした。彼の魅力を描ききった自負はあるので、読者の皆さんにも楽しんでいただけたら嬉しいです。

（取材・文／橋本歩）

私のいちばん
Questions & Answers

Q1 いちばん気になるニュースは？
Answer トランプと習近平の衝突の行方

Q2 いま、いちばん会ってみたい人は？
Answer 高校の同級生だった遠山尚孝君

Q3 いちばん好きな映画は？
Answer 小津安二郎作品

Q4 いちばんよく見るテレビ番組は？
Answer 報道番組はいろいろ見ます

Q5 いちばんの宝物は？
Answer 家族でしょうね

Q6 いちばん執筆に集中できる時間と場所は？
Answer 午前中、自宅ですね

Q7 いちばん行きたい場所は？
Answer 奄美大島。人が優しくて、ゆったりとした気分になります

Q8 いちばんすきな音楽は？
Answer 『禁じられた遊び』

Q9 いちばん大切にしている時間は？
Answer 古い映画を見る時間と、毎日の散歩

Q10 いちばんの野望は？
Answer 酒の類を死ぬまで止めないこと